

平成23年度 文部科学省「博士課程教育リーディングプログラム」

放射線災害復興を推進する フェニックスリーダー 育成プログラム

*Phoenix Leader Education Program (Hiroshima Initiative)
for Renaissance from Radiation Disaster*

平成26年度 自己評価報告書



広島大学
— Hiroshima University —

はじめに

「放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム」は、原爆災害からの復興を支えた広島大学の経験と国の三次被ばく医療機関としての実績を背景に、幅広い学際的な知識を基盤として放射線災害に適切に対応し、明確な理念の下で復興を指導できる判断力と行動力を有したグローバルリーダー（フェニックスリーダー）を育成することを目指した博士課程学位プログラムです。

本プログラムは、広島大学、福島県立医科大学、東北大学、福島大学、長崎大学、放射線影響研究所及び放射線医学総合研究所の61人のプログラム担当者並びにIAEA（国際原子力機関）、WHO（世界保健機関）、IFRC（国際赤十字社・赤新月社連盟）や国内外の多くの研究機関や企業と連携し推進しています。

本プログラムは、文部科学省が2011年度より開始した、大学院教育の抜本的改革を促進し産学官を巻き込んだ世界に通用する質を備えた、4年あるいは5年一貫の学位プログラム、すなわち「博士課程教育リーディングプログラム」の複合領域型（横断的テーマ）として採択され、2017年度まで支援を受ける予定です。

本プログラムも学生を受け入れて3年目に入りました。第1期生は全員、博士論文研究基礎力審査（Qualifying Examination）を乗り越え、10月からは3年生として、博士論文執筆に向けた実践的研究に取り組み始めました。その後姿を追いかけ、2年生に進学した第2期生も、各種報告会で積極的に発表を行い、2月の国際シンポジウムでの発表に向けて準備を行っています。

教育・指導体制もまた大学院生をバックアップするために、メンター制度や、教員・学生意見交換会の定期開催等の様々な対策を講じ、学生・教職員皆が一体となってプログラムを推進しています。

2014年10月には、日本をはじめ、ブラジル、カンボジア、ベトナム、アメリカと国際色豊かな留学生を含む6名が第3期生として入学しました。彼らも入学後すぐに被災地を訪れ、福島第一原子力発電所周辺の現状を目の当たりにして、決意を新たにしました。

本報告書は、中間地点を迎えた本プログラムの全体的な状況を改めて確認するために、大学教育認証評価の9基準に立ち返って、平成26年度の活動を総点検し、合わせて前年度からの課題の改善状況について記したものです。

本報告書に基づき、国内外の産学官界の皆様による評価とご助言をいただくことで、本プログラムを全世界の期待に応える人材育成プログラムとしてさらに成長させていきたいと考えています。忌憚のない評価・助言を賜れば幸いです。

平成27年1月

広島大学大学院 放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム
プログラム責任者 広島大学 理事・副学長 岡本 哲治

目 次

I 前年度課題 1 ページ

II 今年度（平成 26 年度）の基準ごとの評価

基準 1 目的

観点 本プログラムの目的が、文部科学省による「博士課程教育リーディングプログラム」の目的である「俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー」の育成に合致したものであるか。	3 ページ
---	-------

基準 2 実施体制

観点 2-① プログラムにおける指導・支援体制が、プログラムの目的を達成するために、適切なものとなっているか。（課題 1）	4 ページ
観点 2-② プログラムにおける企画・運営・連携体制が、プログラムの目的を達成するために、適切なものとなっているか。	5 ページ

基準 3 担当者及び教育支援者

観点 3-① プログラムにおける教員組織編成の方針が確立され、教育研究に係る責任の所在が明確になっているか。（課題 3）	7 ページ
観点 3-② プログラムにおいて学生の指導を担当する教員は、「放射線災害の複合的な被害からの復興を横断的かつ統合的にマネジメントする「フェニックスリーダー」を育成する」というプログラムの目的に対して適切か。（課題 2, 4）	8 ページ

基準 4 学生の受入状況

観点 4-① 教育の目標に沿って求める学生像及び入学者選抜の基本方針などの入学者受入方針が明確に定められ公表、周知されているか。（課題 7, 16）	9 ページ
観点 4-② 入学者受入方針に沿って適切な学生の受入方法が採用されており、実質的に機能しているか。	10 ページ
観点 4-③ 入学者受入方針に沿った学生の受入が実際に行われているかどうかを検証するための取組が行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立っているか。	11 ページ

基準 5 教育内容及び方法

観点 5-① 教育の目的や授与される学位に照らして、授業科目が適切に配置され、教育課程が体系的に編成されており、授業科目の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものとなっているか。（課題 5, 6, 13, 14, 17）	12 ページ
観点 5-② 分野横断型の指導により多様な背景を持つ学生を学位授与へと導くプロセスの管理及び透明化の手段を備えているか。（課題 11, 12）	14 ページ

観点 5-③ 高度な研究及び実践に豊富に接する中で魅力ある教育を実践し得るよう に教育機能の充実が図られているか。	1 5 点
観点 5-④ 国際的な課題解決に向けて活躍する人材を育成するために、国際的なコ ミュニケーション能力や交渉力を高めるためのさらなる工夫と努力がなさ れているか。	1 6 点
観点 5-⑤ 教育課程の編成の趣旨に沿って適切なシラバスが作成され、活用されてい るか。	1 7 点
観点 5-⑥ 自主学习への配慮, 専門外の他分野に関する科目を履修する学生への配慮 等が組織的に行われているか。	1 8 点
観点 5-⑦ 遠隔地の社会人学生等への授業を行う際に、印刷教材等による授業（添削 等による指導を含む。）、放送授業、面接授業（スクーリングを含む。）、若 しくはメディアを利用して行う授業の実施方法が整備され、適切な指導が 行われているか。（課題 8）	1 9 点

基準 6 教育の成果

観点 6-① 学生が身につける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等に照らし 合わせて、その達成状況を検証・評価するための適切な取組が行われてい るか。	2 0 点
観点 6-② アンケート等、学生からの意見聴取の結果から判断して、教育の成果や効 果が上がっているか。（課題 9, 10）	2 1 点

基準 7 学生支援等

観点 7-① 優秀な学生同士が切磋琢磨し刺激しあう環境が構築できているか。 （課題 18）	2 2 点
観点 7-② 学業及び研究に専念できる、生活支援がなされているか。	2 3 点
観点 7-③ 学生が主体的に独創的な研究を計画・実践できる工夫がなされているか。	2 4 点

基準 8 施設・設備

観点 プログラムにおける教育研究組織の運営及び教育課程の実現にふさわしい施 設・設備が整備されているか。（課題 15）	2 5 点
--	-------

基準 9 教育の質の向上及び改善のためのシステム

観点 プログラムにおける評価体制が、プログラムの実施状況を評価するために、適切 なものとなっているか。	2 6 点
--	-------

I 前年度課題

フェニックスリーダー育成プログラム外部評価委員会の各委員によって記載された「平成25年度 外部評価報告書」の内容から、以下の18点の課題を抽出し、平成26年度の活動において改善を試みた。

No	課題	関連項目	ページ
1	社会科学分野を専門とするプログラム担当者を新たに放射能社会復興コースに加える。	観点 2-①	4
2	幅広い内容の教育セミナーの開催によって、教育に関する教員の意識共有を図る。	観点 3-②	8
3	教育委員会にてティーチングハンドブックを作成し、より良い授業設計のあり方について教員間で情報共有を行う。	観点 3-①	7
4	本プログラム専任の英語教員を雇用し、英語教育の強化に努める。	観点 3-②	8
5	イングリッシュリトリート等の開催により、学生に英語のプレゼンテーションやコミュニケーションの機会を提供する。	観点 5-①	12
6	インターンシップ、学会参加等で海外における活動機会を増加させ、学生に実践的な国際的コミュニケーションの機会を提供する。	観点 5-①	12
7	社会人用のモデル時間割を作成し、多様なワークスタイルに合わせたプログラム履修プランを提示できるようにする。	観点 4-①	9
8	遠隔授業システム、TV 会議システム等の遠隔地の学生をサポートする体制をよりシステムティックに整え、学修の質を安定・向上させる。	観点 5-⑦	19
9	本学の授業評価アンケートに加えて、本プログラム独自の目標に即したアンケートを授業だけでなく多様な学修機会に実施する。	観点 6-②	21
10	評価委員会への学生委員の参加を通じて、学生の意見を反映させうる体制を整える。	観点 6-②	21
11	Bb9 や e-ラーニングポートフォリオシステムの活用により、より正確で迅速な連絡体制を整える。	観点 5-②	14

12	「分野融合セミナー実施要項」に基づき、学生が積極的に各種セミナーや学会に参加した上で報告書を執筆し、教員から迅速に審査、助言を受けられる体制を整え、運用する。	観点 5-②	1 4
13	短期・長期フィールドワークにおける実践的で多様な学修・研究内容を採用する。	観点 5-①	1 2
14	フェニックスリーダー育成プログラム学位授与方針を策定する。	観点 5-①	1 2
15	フェニックスリーダー育成プログラム将来構想を策定する。	基準 8	2 5
16	グローバルで幅広い広報活動を継続的に展開する。	観点 4-①	9
17	選択科目あるいは短期インターンシップとして多様な企業インターンシップを実施する。	観点 5-①	1 2
18	国際シンポジウム等における学生主体の活動機会を増強する。	観点 7-①	2 2

Ⅱ 今年度（平成 26 年度）の基準ごとの評価

基準 1 目的

観点 本プログラムの目的が、文部科学省による「博士課程教育リーディングプログラムの目的である「俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー」の育成に合致したものであるか。

【観点に係る状況及び分析】

採択時よりフェニックスリーダー育成プログラムは、医学、環境学、工学、理学、社会学、教育学、心理学等の各専門学術分野を結集して放射線災害復興学を確立し、放射線災害に適正に対応し、明確な理念の下で復興に貢献できる判断力と行動力を有した国際的に活躍できる分野横断的統合型グローバルリーダー（以下「フェニックスリーダー」という。）の育成を一貫して目的として掲げてきた。

プログラム開始 4 年目を迎えた現在もこの目的に変更はなく、それに向けてプログラムを運営してきたことが評価されている。

平成 26 年 1 月 27 日から 2 日間に渡り、本プログラムと IAEA が主催し、長崎大学、シンガポール国立大学の協力で開催した第 1 回 STS 国際会議では、放射線災害復興を実現するための学生の①学際力、②国際力、③マネジメント力を育成するという本プログラムの教育成果が、学生のプレゼンテーションにいかんなく発揮されているとして、IAEA（国際原子力機関）からも高い評価を受けた。

また、博士課程教育リーディングプログラム委員会（（独）日本学術振興会）からも、本プログラムが目指す放射線災害復興学を、「一つの世界標準として IAEA 等と連携して継続・発展させていく必要があるのではないか」との意見があり、本プログラムの目的が喫緊の必要性和意義を備えていることが強く認識されつつある。

以上のことから、本プログラムの目的は文部科学省の目指すグローバルリーダーの育成という目的に適合していると同時に、加えて放射線災害復興学の確立というもう 1 つの大きな目的も着実に実現してきていると言える。

【自己評価報告書資料集】

- 1 STS 国際会議資料
- 2 博士課程教育リーディングプログラム委員会中間評価スケジュール

基準 2 実施体制

観点 2-① プログラムにおける指導・支援体制が、プログラムの目的を達成するために適切なものとなっているか。

課題 1：社会科学分野を専門とするプログラム担当者を新たに放射能社会復興コースに加える。

【観点に係る状況及び分析】

平成 26 年 10 月からの第 3 期生入学に対しても、各学生に主任指導教員 1 人、各コースから最低 1 人以上の副指導教員計 4 人以上から構成される指導体制を整えた。その際、文学研究科に所属する放射能社会復興コースの新入生は、文学研究科の教員 2 人がプログラム担当者として本プログラムに参画すると同時に、主・副指導教員として新入生の指導にあっている。またそれ以外でも、様々な機会に学外の連携機関に所属する専門家から指導を受けることを可能にしている。

学生への支援体制は、従前の学生のケア・相談窓口をメンター制度として再編し、詳細を記載したメンターハンドブックを作成して教員・学生に周知徹底を図った。これにより、学生は学際的な研究の実践をサポートする教員メンター、修学全般のサポートを行う学生相談メンター、経験に基づき学生生活をサポートする先輩メンターの構造化されたサポートを受けることができるようになった。

こうしたことから、プログラムの指導体制は幅広い分野の教員をプログラム担当者に加え、本プログラムの目的である分野横断的指導を可能にしている。

また、包括的に学生のニーズを把握、調整を行うためのメンター制度を構築したことで、学生が安心して学修に専念し得る環境を整え、プログラムの目的達成に着実に近づいている。

【自己評価報告書資料集】

- 3 指導教員一覧
- 4 メンターハンドブック
- 5 他機関との連携実績一覧
- 6 フェニックスリーダー育成プログラム担当者名簿

観点2-② プログラムにおける企画・運営・連携体制が、プログラムの目的を達成するために、適切なものとなっているか。**【観点に係る状況及び分析】**

本年度は、学生へのキャリアパスの具体的な提示と、国際シンポジウム等の企画への学生の主体的な参加に重点を置き、以下のとおり実現した。

学長を機構長とする広島大学大学院リーディングプログラム機構（以下「リーディングプログラム機構」という。）を基盤とし、フェニックスリーダー育成プログラム全体会議（以下「全体会議」という。）とフェニックスリーダー育成プログラム運営会議（以下「運営会議」という。）及び各コース会議、ヒロシマ・フェニックストレーニングセンター運営委員会、教育委員会、評価委員会、入試委員会、学生生活委員会、情報推進委員会、フィールドワーク実施委員、国際交流委員会からなる企画・運営体制に、新たに学生のキャリアパスについての様々な企画を検討するためのキャリアパス委員会を設置し、フェニックスリーダーシップセミナー等を開催した。

加えて本プログラム最大のイベントである国際シンポジウムを円滑に実施するために国際交流委員会の下に国際シンポジウムワーキンググループを組織し、4人の学生メンバーが中心となって教員と協力して企画・準備に当たった。

また、前述のメンター制度の構築により、学生とより密接に関わる教員メンターを全員学生生活委員会の委員とし、より学生の声を聴くことのできる体制を整えた。

本プログラムの学外との連携態勢としては、今年度は7つの企業、研究機関等で短期インターンシップを実施し、合計で14の機関と連携してセミナーやフィールドワークの実施、施設見学、入学試験及び博士論文研究基礎力審査（Qualifying Examination）（以下「QE」という。）等への協力などの多様な形での連携を実現している。

したがってキャリアパス構築に向けたセミナー等の企画実現、ワーキンググループ等による迅速な運営推進、産学官を問わない多様な連携態勢が着実に実現されつつあり、本プログラムが目標とする文理融合、産学官連携の教育によるフェニックスリーダーを育成する体制が順調に整えられている。

【自己評価報告書資料集】

- 4 メンターハンドブック
- 5 他機関との連携実績一覧
- 7 キャリアパス委員会名簿
- 8 キャリアパス構築・充実のための活動一覧
- 9 フェニックスリーダーシップセミナー資料
- 10 放射線災害医療コースセミナー資料
- 11 国際シンポジウムワーキンググループ名簿

- 12 国際シンポジウムワーキンググループ審議一覧
- 13 学生生活委員会名簿
- 14 第2回短期フィールドワーク実施概要
- 15 ショートフィールドビジット一覧
- 16 博士論文研究基礎力審査（QE）審査委員一覧

基準 3 担当者及び教育支援者

観点 3-① プログラムにおける教員組織編成の方針が確立され、教育研究に係る責任の所在が明確になっているか。

課題 3：教育委員会にてティーチングハンドブックを作成し、より良い授業設計のあり方について教員間で情報共有を行う。

【観点に係る状況及び分析】

平成 26 年 10 月入学の第 3 期生も含め、全ての学生に対して、主任指導教員 1 人と副指導教員を各コースから最低 1 人（プログラム担当者以外の教員も含む）計 4 人以上の指導体制を整え、各教員が組織的に指導を行っている。

また、第 1 期生の QE を実施した。その際、学生を審査する QE 審査委員は、3 コースそれぞれのプログラム教員や他研究科の教員に加えて、東北大学や（独）放射線医学総合研究所等、学外のプログラム担当者も含む多様なメンバー構成で行い、学生の能力を多角的に審査し、責任の明確化と質の担保を可能にした。

加えてプログラムへの関与の度合いによってバラつきのあった教員間のプログラムについての認識の差を埋めるため、本プログラムの教育理念や目的、カリキュラムマップ、到達基準をまとめたティーチングハンドブックを教育委員会にて作成し、全プログラム担当者に配布の上、周知して教育への姿勢を共有した。

したがってプログラム責任者、コーディネーターを中心として各コースリーダー、プログラム担当者、授業担当者等の責任の所在を明確にするとともに、それぞれの学年において専門分野教育と分野横断型教育とを統合・推進しうる指導体制を構築した。

また、その教育・指導の成果を審査・担保するための QE においても積極的に外部の目線を入れ、多角的に審査した上で学生の質を保証している。

【自己評価報告書資料集】

- 3 指導教員一覧
- 5 他機関との連携実績一覧
- 16 博士論文研究基礎力審査（QE）審査委員一覧
- 17 ティーチングハンドブック

観点3-② プログラムにおいて学生の指導を担当する教員は、「放射線災害の複合的な被害からの復興を横断的かつ統合的にマネジメントする「フェニックスリーダー」を育成する」というプログラムの目的に対して適切か。

課題2：幅広い内容の教育セミナーの開催によって、教育に関する教員の意識共有を図る。

課題4：本プログラム専任の英語教員を雇用し、英語教育の強化に努める。

【観点に係る状況及び分析】

今年度は5人が新たにプログラム担当者として参画した。いずれも放射能社会復興コースや放射能環境保全コースに所属する学生の主・副指導教員や専任英語教員、授業担当者等として学生の指導を担当し、本プログラムの英語教育や学生指導、各担当授業の内容等を充実させることができた。

また、新たなプログラム担当者が授業等で学生の指導を行う際には、前述のティーチングハンドブックを基に本プログラムの理念や目的を共有できるようにしている。

加えて今年度は通算で第5回となる教育セミナーを「新しい大学院教育の質保証システム構築」と題して学外にも公開で開催し、他大学等のリーディングプログラム関係者も多数参加し、本プログラムの教育システムについて議論を交わし、情報交換を行い、より適切な指導に向けてプログラム担当者の共通理解を形成した。

英語教育に関しては、新たに専任の英語教員を本プログラムの担当者として採用し、従来の英語科目をイングリッシュ・コミュニケーション、イングリッシュ・レトリック、イングリッシュ・プレゼンテーション、サイエンティフィック・イングリッシュとして再編し、さらにイングリッシュリトリートの開催や異分野交流フォーラムにおける英語でのディスカッション等を行い英語教育の強化を図った。また学生個別の英語能力を試験によって把握し、個々の学生の課題に合わせた英語教育を実施している。

上述の教育セミナーの開催、前述のティーチングハンドブックの作成等によってプログラム担当者間でプログラムの目的等の共有を行うとともに、放射能社会復興コース教員や英語専任教員等の積極的な登用によりフェニックスリーダーの育成に必要な人員を揃え、目的に適合した教育を実施することが可能となった。

【自己評価報告書資料集】

- 3 指導教員一覧
- 6 フェニックスリーダー育成プログラム担当者名簿
- 18 第5回教育セミナー資料
- 19 英語科目シラバス
- 20 第3回リトリート報告書
- 21 第1回異分野交流フォーラム報告書

基準 4 学生の受入状況

観点 4-① 教育の目標に沿って求める学生像及び入学者選抜の基本方針などの入学者受入方針が明確に定められ公表、周知されているか。

課題 7：社会人用のモデル時間割を作成し、多様なワークスタイルに合わせたプログラム履修プランを提示できるようにする。

課題 16：グローバルで幅広い広報活動を継続的に展開する。

【観点に係る状況及び分析】

引き続き平成 27 年 10 月入学生の獲得に向けて、本プログラムの教育目標、求める人材像や入学者選抜の基本方針、入学者受入方針を明記した平成 27 年 10 月入学の学生募集案内及び募集要項を作成し、国内外の大学や関係機関、プログラム担当者へ送付して周知するとともに、ホームページ上等で幅広く公開している。

また、今年度も広報活動として日本全国での入試説明会を行い、海外でもベトナムのホーチミンやハノイ、インドネシアのバンドン、韓国のソウル、台湾の留学フェア等で積極的にプログラムの説明や入試説明会などの広報活動を行った。

雑誌等での広報についても、引き続き教職課程、実験医学、細胞工学、Journal of Radiation Research に広告を掲載するとともに、今年度は Web 大学・大学院展や Nature PUBLISHING INDEX 2013, Study International に広島大学及び本プログラムの紹介を掲載した。

また、平成 26 年度 12 月現在、5 名の学生が職業を持っているが、入試説明会等の資料においては、これまでの社会人学生の時間割等を参考に社会人モデル時間割を作成し、卒業までの明確な見通しを持った社会人学生を受入れている。

以上のことから、今年度の入試・広報活動においても、本プログラムの方針を明確かつ幅広く公表し、社会人の受入対応も視野に入れながら国内外を問わず広報活動を継続している。

【自己評価報告書資料集】

- 22 平成 27 年 10 月入学募集案内
- 23 平成 27 年 10 月入学募集要項
- 24 社会人モデル時間割
- 25 国内入試説明会一覧
- 26 海外入試説明会一覧
- 27 募集案内掲載雑誌一覧
- 28 その他広報資料

観点4-② 入学者受入方針に沿って適切な学生の受入方法が採用されており、実質的に機能しているか。**【観点に係る状況及び分析】**

平成26年10月入学生（第3期生）を選抜するために、第一次募集試験（2月）と第二次募集試験（7月）を行った。

いずれの試験もプログラム責任者、プログラムコーディネーター、各受験生が主指導教員として志望するプログラム担当者が試験の審査を行うとともに、三菱重工業（株）や中国電力（株）の外部の審査委員も交えて試験の審査を行い、産学官それぞれの視点を取り入れた入試を実現している。

試験方法としては、受験生の専門性、志望動機、分野横断的な応用力を測る小論文の作成を含む第1次選抜（書類審査）と、語学力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力を測る英語での個人面接、集団面接、プレゼンテーションを1泊2日の合宿形式で行う第2次選抜（面接審査）を実施している。第二次募集試験の第2次選抜では受験者が1人のため、1日のみの試験に短縮しているが、試験の構成には変化なく、厳正に受験者の能力を審査している。

結果として、今年度は6人の学生が本プログラムに入学しており、国籍も日本以外ではブラジル、カンボジア、ベトナム、アメリカと幅広く、これまで入試説明会を行ってきたブラジルやベトナムからも優れた能力、強い志望理由を有する学生が入学したことは、入試システムが充実してきている証であるとともに、広報活動の成果でもある。

【自己評価報告書資料集】

29 入試説明会参加者・入学者一覧

観点4-③ 入学者受入方針に沿った学生の受入れが実際に行われているかどうかを検証するための取組が行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立っているか。

【観点に係る状況及び分析】

本プログラムの入試委員会では年度ごとの学生受入状況が本プログラムの趣旨と比較して適切に行われているかどうか検証し、次年度の入試・広報活動に向けて課題の抽出と改善とを随時行っている。

今年度は、複数の海外拠点での広報活動が功を奏し、国籍、年齢、バックグラウンドが豊かな6人の学生を受け入れることができたため、平成27年の学生募集では、更なる優秀な日本人学生の獲得を目指して、国内の入試説明会会場については、福島、東京、大阪及び福岡の他に札幌、仙台、名古屋とこれまでより3ヶ所を追加して計画した。

募集要項公開後は、速やかに募集案内等を他大学や他機関等、関係各所に送付するとともに、学内の様々な施設に募集案内ポスターを掲示するなどの地道な改善を行った。

また、海外拠点を活用した広島大学の研究科説明会にはすべて参加し、本プログラムの広報活動を行うとともに、プログラム担当者も積極的に参加学会等でのパンフレット配布や募集案内の掲示を行った。

加えて既存の雑誌媒体以外にも、複数のウェブサイトで広報を行うなどの活動を続けている。

以上のことから、入試委員会を中心として学生受入の現状把握と改善を行っており、今後とも更なる優秀な学生の受入を目指して広報活動を充実・強化していく。

【自己評価報告書資料集】

- 25 国内入試説明会一覧
- 26 海外入試説明会一覧
- 27 募集案内掲載雑誌一覧
- 28 その他広報資料
- 30 平成26年度入試委員会審議一覧

基準 5 教育内容及び方法

<p>観点 5-① 教育の目的や授与される学位に照らして、授業科目が適切に配置され、教育課程が体系的に編成されており、授業科目の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものとなっているか。</p>
<p>課題 5：イングリッシュリトリート等の開催により、学生に英語のプレゼンテーションやコミュニケーションの機会を提供する。</p>
<p>課題 6：インターンシップ、学会参加等で海外における活動機会を増加させ、学生に実践的な国際的コミュニケーションの機会を提供する。</p>
<p>課題 1 3：短期・長期フィールドワークにおける実践的で多様な学修・研究内容を採用する。</p>
<p>課題 1 4：フェニックスリーダー育成プログラム学位授与方針を策定する。</p>
<p>課題 1 7：選択科目あるいは短期インターンシップとして多様な企業インターンシップを実施する。</p>

【観点に係る状況及び分析】

本学で文部科学省博士課程教育リーディングプログラムに採択されたフェニックスリーダー育成プログラムとたおやかで平和な共生社会創生プログラムに共通する学位授与方針をリーディングプログラム機構運営会議で策定し、それに基づく審査体制を構築した上での学位授与を目指して、各研究科との間で連携を強化することを改めて確認した。

フェニックスリーダー育成プログラムは、フェニックスリーダーの根幹をなす3つの能力、①国際力、②学際力、③マネジメント力に沿って教育カリキュラムを編成している。

本プログラムの教育カリキュラムは、学生に公開されているシラバスに基づき実施されるが、そのすべてにプログラムでのこの授業の位置付け、評価基準を明記し、カリキュラムマップと合わせて、その授業が学位授与に至るプロセスのどこに位置付けられているのかを教員、学生間で共有している。

また、学際力のみならず、修得の困難な国際力、マネジメント力に関しても、英語専任教員を採用し国際力の強化、フィールドワークやインターンシップ、リトリート等によるマネジメント力の向上を図ることで順調にカリキュラムの充実を図っている。

本年度は9月に第2回短期フィールドワークを実施すると同時に、企業インターンシップとしてマツダ（株）で11人の学生が短期インターンシップを行っている。

さらに（株）千代田テクノル、（独）国立環境研究所、南相馬市立総合病院及び（独）放射線医学総合研究所と、産学官を問わずインターンシップ受入機関を拡大させている。

加えて学生には海外の学会等に参加する際にはプログラムより旅費等の支援を受けることができ、それによって積極的に海外での経験を積んできている。

また、3年次生以上を対象にした長期フィールドワークや長期インターンシップも実施体制を確立しつつあり、既に1人の学生がIAEAでの4カ月程度の長期インターンシップを行うことが決定している。

加えて第1回異分野交流フォーラム（10月実施）やSTS国際会議（11月実施）等の授業外学習の機会を豊富に用意し、本プログラムの目的とするフェニックスリーダーの育成にふさわしいカリキュラムを提供している。

【自己評価報告書資料集】

- 1 STS 国際会議資料
- 6 フェニックスリーダー育成プログラム担当者名簿
- 14 第2回短期フィールドワーク実施概要
- 17 ティーチングハンドブック
- 19 英語科目シラバス
- 20 第3回リトリート報告書
- 21 第1回異分野交流フォーラム報告書
- 31 リトリート一覧
- 32 第4回リトリート概要
- 33 短期インターンシップ一覧
- 34 学位授与方針
- 35 履修細則
- 36 長期フィールドワーク実施要領
- 37 平成26年度学生が参加した海外学会一覧

観点5-② 分野横断型の指導により多様な背景を持つ学生を学位授与へと導くプロセスの管理及び透明化の手段を備えているか。

課題 11: Bb9 や e-ラーニングポートフォリオシステムの活用により、より正確で迅速な連絡体制を整える。

課題 12: 「分野融合セミナー実施要項」に基づき、学生が積極的に各種セミナーや学会に参加した上で報告書を執筆し、教員から迅速に審査、助言を受けられる体制を整え、運用する。

【観点に係る状況及び分析】

本プログラムを履修する学生を学位授与へと導くプロセスは、今年度に制定した学位授与方針を基盤として、分野横断型の各種カリキュラムとそれを位置付けるカリキュラムマップによって明示されている。

また、各学生の履修状況管理は、それぞれの主・副指導教員及びフェニックスリーダー育成プログラム事務室が中心となって、e-ラーニングポートフォリオシステムやオンライン学習支援システム（Blackboard 9、以下「Bb9」という。）等を媒介として行われる。これらのオンラインシステムについては、頻繁に現状の問題把握とその改善に努めており、新入生への使用方法の説明会開催とも合わせて、学生の利便性向上と学修到達状況の自己把握の促進を行っている。

上述のオンラインシステムを介した迅速な連絡に加え、定期的に大学院生連絡会を開催することで、丁寧な情報共有を実現している。

また、通常のカリキュラムでは修得することの出来ない多様な分野の知識を身につける試みとして、プログラムが認める様々なセミナーに学生が出席し、その報告書を提出することで単位を認定する分野融合セミナーも、今年度より要項等を整え運用を開始している。学生達は、個人差はあるものの積極的に種々の学会等へ参加し報告書を多数提出しており、現在関連分野の教員を中心に審査を進めている。

したがってプログラム全体の学位授与へのプロセス、その道程の学生自身の学修到達状況把握のためのシステムは整理されており、今後もシステムの充実、問題点の改善を通じて適切な管理・指導を行っていく。

【自己評価報告書資料集】

- 34 学位授与方針
- 38 e-ラーニングポートフォリオの現状と改善
- 39 大学院生連絡会一覧
- 40 分野融合セミナー報告書提出状況等一覧

**観点5-③ 高度な研究及び実践に豊富に接する中で魅力ある教育を実践し得るよう
に教育機能の充実が図られているか。****【観点に係る状況及び分析】**

分野横断型の知見を必要とし、様々な領域、現場で最先端の研究やプロジェクト運営に接する経験が求められる本プログラムの学生に対しては、通常の授業科目だけではなく、豊富な授業外学習の機会が用意されている。

単位修得が必須となっているインターンシップ、フィールドワークのみならず、学生達は任意ではあるが積極的に、被災地の福島県南相馬市、(独)日本原子力研究開発機構(JAEA)、中国電力(株)島根原子力発電所、(独)放射線医学総合研究所、(独)国立環境研究所等の産学官の各施設を訪れるショートフィールドビジットを開催し、被災地の様子や研究機関の最先端の施設や研究内容に触れている。

リトリート(年2回開催)やフェニックスリーダーシップセミナー、放射線災害医療コースセミナー等の各種セミナー(随時開催)においても、分野を問わず産学官の有識者を招聘し、講演だけでなく学生達と直にディスカッションを行っている。

加えて国内外の学会参加には本プログラムから旅費等の支援を行い、学生の自主的な学習を促進している。

これらの授業外学習の機会は、今後も充実させ、学生が多様かつ高度な実践的経験を積み、フェニックスリーダーとして成長することが期待される。

【自己評価報告書資料集】

- 8 キャリアパス構築・充実のための活動一覧
- 9 フェニックスリーダーシップセミナー資料
- 10 放射線災害医療コースセミナー資料
- 14 第2回短期フィールドワーク実施概要
- 15 ショートフィールドビジット一覧
- 31 リトリート一覧
- 33 短期インターンシップ一覧
- 37 平成26年度学生が参加した海外学会一覧
- 41 オークリッジ科学研究所放射線緊急時支援センタートレーニング参加者一覧
- 42 平成26年度学生が参加した国内学会一覧

観点5-④ 国際的な課題解決に向けて活躍する人材を育成するために、国際的なコミュニケーション能力や交渉力を高めるためのさらなる工夫と努力がなされているか。

【観点に係る状況及び分析】

本プログラムの英語による国際的なコミュニケーション能力に関する教育は、今年度より新たにプログラム担当者となった英語専任教員を中心に改善を重ねている。

英語科目の再編に加え、英語能力の評価基準を新たに明確化し、また日本語のみで開講されていた科目の英語化等を進め、当初は全42科目中26科目が英語で開講されていたが、現在は全39科目中31科目にまで増加した。

また、正規の授業以外でも英語に触れる機会を作るため、共通コースワークや短期インターンシップ、短期フィールドワーク等の報告会はすべて学生主体で英語によるプレゼンテーションと質疑応答を行っている。

他大学のリーディングプログラムの大学院生や、海外の著名な研究者ともディスカッション等を通してコミュニケーションを行う機会を得るため、今年度は第1回異分野交流フォーラム（10月開催）や STS 国際会議（11月）等への参加を促すとともに、第2回短期フィールドワーク（9月実施）には他大学のリーディングプログラムの大学院生も参加した。

これらの学生の活動は、すべて年度末の国際シンポジウム（2月開催）でのプレゼンテーションに結実し、学生達がこの1年間で身につけた国際的なコミュニケーション力は、学修・研究活動の成果とともに示されることになる。

以上のことから、本プログラムでは通常のカリキュラムの改善と充実、加えて英語での多数のプレゼンテーションと多様な人々とのディスカッション、コミュニケーションの機会を新たに設け、グローバル人材の育成に努めていると言える。

【自己評価報告書資料集】

- 1 STS 国際会議資料
- 21 第1回異分野交流フォーラム報告書
- 43 開設科目使用言語一覧
- 44 英語教育の学習成果の評価の取扱い
- 45 平成26年度共通コースワーク報告会一覧
- 46 平成26年度短期インターンシップ報告会一覧
- 47 第2回短期フィールドワーク報告会概要
- 48 国際シンポジウム一覧

観点5-⑤ 教育課程の編成の趣旨に沿って適切なシラバスが作成され、活用されているか。**【観点に係る状況及び分析】**

本プログラムの授業を担当する教員は、前述のティーチングハンドブックに基づき、明確なカリキュラムポリシーのもとにシラバスを作成し、それを基に授業を実施している。

各シラバスには本プログラムの学修目標との関係も明記されており、教員は常にコースワークの理念を意識しながら、体系的、順次性が担保された授業を行っている。

これらのシラバスは広島大学の学生専用ウェブサイトもみじ等を通じて公開されており、プログラムを履修する学生は Semester の開始前に各授業のシラバスを参考にして自身の時間割を作成している。

もちろんこれらのシラバスは日本語と英語両方のバージョンを作成しており、学生、教員ともに有効に活用している。

【自己評価報告書資料集】

17 ティーチングハンドブック

観点5-⑥ 自主学習への配慮，専門外の他分野に関する科目を履修する学生への配慮等が組織的に行われているか。**【観点に係る状況及び分析】**

分野横断型カリキュラムの特性上，放射線災害復興という複合的課題に臨機応変に対応する力を身につけるという観点からも，博士論文研究を開始する3年次までには，3コースすべての領域の基礎的学習を行う必要がある。他分野の科目履修については，第一に，その必要性を明確に共有するため被災地において早期の実地実習を授業に取り入れ，学生自らが積極的に学ぶ体制を構築してきた。

一方で，3年次に進学して以後は，博士論文研究に集中する時間を確保するために，必修の長期フィールドワークと長期インターンシップを整理し，できるだけ研究時間を確保する体制とした。

また，専門外の他分野に関する科目履修の支援体制として，前述のメンター制度のうち，教員メンターを新たに設け，学生達は主・副指導教員とは別に，様々な分野の教員メンターに学習の質問や研究についてのアドバイスを受けたりすることが可能となっている。

したがって本プログラムの学生は，QE までの2年間で培った分野横断的知識を基盤として，3年次以降は博士論文執筆のための研究に集中することが可能となり，またそのためのアドバイザーも教員メンターとして配置されていることから，自主的に分野の垣根を超えた研究が行える支援体制を構築した。

【自己評価報告書資料集】

- 4 メンターハンドブック
- 35 履修細則
- 49 長期フィールドワーク及び長期インターンシップに係る履修細則別表改正資料

観点5-⑦ 遠隔地の社会人学生等への授業を行う際に、印刷教材等による授業（添削等による指導を含む。）、放送授業、面接授業（スクーリングを含む。）、若しくはメディアを利用して行う授業の実施方法が整備され、適切な指導が行われているか。

課題 8：遠隔授業システム、TV 会議システム等の遠隔地の学生をサポートする体制をよりシステムティックに整え、学修の質を安定・向上させる。

【観点に係る状況及び分析】

本プログラムでは遠隔地で仕事を続けながらプログラムを履修する学生を継続的に支援する体制を構築してきた。

東京在住の社会人学生は、主として広島大学東京オフィスを拠点として授業を履修することが可能だが、その際には英語科目等の非常勤講師を採用して行う授業、専用の各種機材を用いて広島・東京間での遠隔授業を行う双方向授業がある。

遠隔授業を行う際の機材には、主に広島大学東広島・霞両キャンパスと福島大学や東北大学、(独)放射線医学総合研究所等の協力機関を映像と音声で繋ぐテレビ会議システムや、書画カメラ等により遠隔地の学生の筆記テスト等にも対応可能な環境をプログラム開始時に整備した。

それに加えて、予習・復習に活用できるコンテンツ収録・配信システムを活用し、遠隔地の学生の授業における双方向的指導を実現し、授業前後の自主学習の適切な支援を行っている。

さらに、遠隔地の学生に授業を行う教員は、メール等での課題の提出、添削や質疑応答への対応等を適宜行っている。結果として、遠隔地で授業を受講している学生もQEを合格することができた。

以上のように、本プログラムでは、継続的に遠隔地の社会人学生への授業方法を綿密に計画実現し、適切な指導が行われている。

【自己評価報告書資料集】

50 遠隔授業システム機器一覧

基準 6 教育の成果

観点 6-① 学生が身につける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等に照らし合わせて、その達成状況を検証・評価するための適切な取り組みが行われているか。

【観点に係る状況及び分析】

本プログラムでは、学修目標を明示した上で、学生の学修成果に基づく到達度評価の仕組みを備えている。学生の授業における課題レポートなど学習成果は、オンライン学習支援システム（Blackboard 9 (Bb9)）に、研究活動や授業外の学修機会における成果等は e-ラーニングポートフォリオシステムに蓄積されている。

これらの成果は、各授業科目の成績の根拠となるだけではなく、インターンシップ、フィールドワーク、共通コースワークなど、分野融合型の授業における成果は、授業担当者以外のプログラム担当者も評価する報告会等の機会が設けられ、プログラムの学修目標に対する到達度評価の根拠となっている。また、学会の参加など個別の学修機会の成果を確認した上で、一定の成果に対して単位を認定する科目「分野融合セミナー」も全プログラム担当者が評価する体制で実施している。

上述の学習成果に基づく継続的な評価を元に平成 26 年に第 1 期生を対象に QE を実施し、授業（コースワーク）に関する筆記試験、研究（リサーチワーク）に関する英語による口頭試問、e-ラーニングポートフォリオを用いた学修成果の確認により、学修目標への到達度を審査し合格させた。

以上の QE を中心とする幾重もの評価体制によって、プログラムの目標に対する到達度を確実に検証・評価している。

【自己評価報告書資料集】

- 16 博士論文研究基礎力審査 (QE) 審査委員一覧
- 17 ティーチングハンドブック
- 38 e-ラーニングポートフォリオの現状と改善
- 40 分野融合セミナー報告書提出状況等一覧

観点 6-② アンケート等, 学生からの意見聴取の結果から判断して, 教育の成果や効果が上がっているか。

課題 9 : 本学の授業評価アンケートに加えて, 本プログラム独自の目標に即したアンケートを授業だけでなく多様な学修機会に実施する。

課題 10 : 評価委員会への学生委員の参加を通じて, 学生の意見を反映させうる体制を整える。

【観点に係る状況及び分析】

本プログラムの授業科目は, 通常の授業アンケートも実施しているが, それとは別に短期フィールドワーク, リトリート及びショートフィールドビジット等の授業外学修の機会についても独自に学生対象のアンケート調査を行い, 課題や改善点を抽出して次回に向けてフィードバックを行っている。

なお, アンケート結果は概ね好評であるものの, 数値には現れない課題等を個別のコメントからピックアップして改善を行っている。

また, 学生からの意見聴取の場としては, 平成 25 年度から教員・学生意見交換会を開催しており, これまでに, 科目履修のための学生の動線に配慮した, 時間割の調整や日本の税制度の案内等, 学生のニーズに応じた細やかな対応へとつながった。この体制に対しては学生からも高い評価を得ている。この意見交換会は今後も年 2 回程度を目安に継続する予定である。

加えて今年度は, 先輩メンター等の 3 人の学生が評価委員として外部評価委員会に出席し, 学生の立場から意見を述べる予定であり, 今後も学生の意見を聴取し, その意見を反映するとともに, 改善を行う体制を構築していく。

上述のとおり本プログラムでは学生の意見をアンケート, 意見交換会や評価委員会等を通じて聴取し, それを本プログラムの充実・発展に生かしている。

【自己評価報告書資料集】

- 51 第 2 回教員・学生意見交換会概要
- 52 短期フィールドワークアンケート結果一覧
- 53 リトリートアンケート結果一覧
- 54 ショートフィールドビジットアンケート結果一覧
- 55 評価委員会名簿

基準 7 学生支援等

観点 7-① 優秀な学生同士が切磋琢磨し刺激しあう環境が構築できているか。

課題 18：国際シンポジウム等における学生主体の活動機会を増強する。

【観点に係る状況及び分析】

第 1 期生が入学し、プログラムが実質的に稼働して 3 年目を迎えるが、学生が主体的にディスカッションやプレゼンテーションを行う機会は確実に増加してきている。英語科目等、普段の授業から学生達は英語でのディベートやディスカッションの訓練を行い、インターンシップやフィールドワーク、共通コースワーク等の報告会でプレゼンテーションの経験も積み重ねている。

また、今年度の短期フィールドワーク（9 月実施）や第 1 回異分野交流フォーラム（10 月実施）では、他大学のリーディングプログラムの大学院生等も参加しており、他大学の学生等も交えてディスカッションやプレゼンテーションを行っている。

そうした経験の集大成として、本年度も第 4 回国際シンポジウムを 2 月に開催し、学生達は、今年 1 年の成果をプレゼンテーションする予定である。

また、この国際シンポジウムは、学生を主体とするワーキンググループの活動によって開催されており、4 人の学生委員が中心となってプログラム作成、スケジュール管理、講師招聘及びポスター発表、個人研究発表等の企画をすべて行っている。

以上のことから、本プログラムでは国際シンポジウムだけでなく、多様な機会において学生同士が、他大学の学生も交えて切磋琢磨し、刺激しあうことが可能となっている。

【自己評価報告書資料集】

- 11 国際シンポジウムワーキンググループ名簿
- 12 国際シンポジウムワーキンググループ審議一覧
- 20 第 3 回リトリート報告書
- 45 平成 26 年度共通コースワーク報告会一覧
- 46 平成 26 年度短期インターンシップ報告会一覧
- 47 第 2 回短期フィールドワーク報告会概要

観点7-② 学業及び研究に専念できる、生活支援がなされているか。**【観点に係る状況及び分析】**

本プログラムは開始当初よりこれまで、月額20万円程度の奨励金の受給を始め、学生宿舎やノートパソコンの貸与、国内・海外の学会参加費用の支援などの多様な支援策によって、経済面の不安を払しょくして学業及び研究に専念できる環境を用意してきた。

加えて、両キャンパスに設置していた本プログラム学生専用の大学院生室のうち、手狭だった東広島キャンパスの大学院生室をより大きく設備も充実した部屋に移し、学生達の自主勉強や共同のジャーナルクラブ等、様々な用途で自由に利用されている。

また、教員・学生意見交換会の実施やメンター制度の稼働によって判明した学生達の日常生活での悩み等にも積極的に助言を行うなど生活環境への支援を行っている。一例として、外国人留学生が抱える確定申告や納税の問題に対して、ガイドラインを作成して対応することができた。

学生が入学した当初の生活支援に加え、学習・研究活動を進めて2年次、3年次と進学していくにつれて現れる様々な生活上の問題に対しても、教員・学生意見交換会やメンター制度によって迅速に要望を把握して解決を図り、学生が勉学に専念できる環境を提供することができる。

【自己評価報告書資料集】

- 4 メンターハンドブック
- 51 第2回教員・学生意見交換会概要
- 56 大学院生室等の利用方法（東広島キャンパス）
- 57 ジャーナルクラブ実績一覧
- 58 奨励金に係る所得税等の手続き

観点7-③ 学生が主体的に独創的な研究を計画・実践できる工夫がなされているか。**【観点に係る状況及び分析】**

学生の学会参加支援等、各自の研究を促進する仕組みを備えており、研究に独創性を与える土壌を涵養している。

また、博士論文執筆のための研究にかかる様々な旅費や機材、書籍購入等にかかる費用は、本プログラムから研究活動支援金という形で支援を行っている。この研究活動支援金は QE に合格した学生を対象とし、1 セメスターごとに上限を 50 万円とし、学生はセメスターの開始時に研究計画と費用の見積もり等を提出し、指導教員等の審査によって評価され、学長の承認を得た後、交付される。

したがって1セメスターごとに学生の研究計画の自己点検と教員からの評価が行われることになり、豊富な研究支援と緊密な指導とを両立している。それにより本プログラムでは学生が教員の適切な指導の下、従来よりもはるかに自由な研究を自主的に展開しうる体制が整えられている。

【自己評価報告書資料集】

- 37 平成26年度学生が参加した海外学会一覧
- 42 平成26年度学生が参加した国内学会一覧
- 49 長期フィールドワーク及び長期インターンシップに係る履修細則別表改正資料
- 59 平成24年10月入学生（3年次生）研究テーマ一覧
- 60 研究活動支援金要項（抜粋）

基準 8 施設・設備

観点 プログラムにおける教育研究組織の運営及び教育課程の実現にふさわしい施設・設備が整備されているか。

課題 15：フェニックスリーダー育成プログラム将来構想を策定する。

【観点に係る状況及び分析】

本プログラムでは、放射線災害復興に関わる知識や技術の修得を可能にするため、当初より設備の充実を図ってきた。精密型・簡易型ホールボディカウンターや低バックグラウンド Ge 検出器、全身除染槽、イメージアナライザー、ハイボリュームエアサンプラー、GM/NaI サーベイメーター等の放射線に関する最新機器を揃えたヒロシマ・フェニックストレーニングセンターが稼働しており、被ばく線量評価・除染トレーニング、初期被ばく・内部被ばく・疫学演習、放射性物質スクリーニング・除染演習、放射線計測演習といった共通コースワーク科目の実施において活用され、学生は実践的な環境において最新の機器を用いた経験を積むことが可能となっている。

また、学生は全員、これらの設備を活用して放射性物質を取り扱うための放射線業務従事者への登録を行っており、事前に義務付けられている教育訓練においても、放射性物質を取り扱う際の安全性について学習している。

さらに、学際型の学修環境の整備として、前述のように整備した大学院生室は、常に利用可能であり、大学院生は様々な形で交流しながら互いの知見を共有している。

なお、本プログラムは文部科学省の支援期間終了後も何らかの形で継続することを計画しており、研究科として独立させるなど、様々な方法が考えられるが、現在、最善の方法を検討中である。

したがって本プログラムは将来の継続性も含めて、目的に沿った組織作り及び施設の拡充を行っている。

【自己評価報告書資料集】

- 56 大学院生室等の利用方法（東広島キャンパス）
- 61 放射線業務従事者登録等の取扱い
- 62 将来構想

基準 9 教育の質の向上及び改善のためのシステム

観点 プログラムにおける評価体制が、プログラムの実施状況を評価するために、適切なものとなっているか。

【観点到に係る状況及び分析】

本プログラムの評価体制は、プログラム内に設置された評価委員会と、プログラム外部の有識者を委員とする外部評価委員会からなる。今年度は評価委員会に新たに3人の学生代表を加え、大学院生からの意見も評価に組み込む体制を整えた。その上で今年度のプログラムの活動及び状況を9つの基準ごとに再点検して自己評価報告書を作成し、外部評価委員会での審議及び外部評価委員による評価を受けることとしている。

外部評価委員からの評価及びプログラムへの意見は、外部評価報告書として刊行し、次年度の活動の改善計画の重要な参考資料となっている。

上述の自己評価報告書の作成、外部評価委員会によるチェック、外部評価報告書の公開という一連のプロセスから、プログラムの実施状況は適切に評価・改善されてきており、また学生代表の加入により、多角的な意見の聴取・反映が可能な体制を整えている。

さらに、博士課程教育リーディングプログラム委員会（(独)日本学術振興会）のプログラムオフィサーからの指導・助言（年2回程度）に迅速に対応するために評価委員会や運営会議が有効に機能している。

【自己評価報告書資料集】

- 55 評価委員会名簿
- 63 外部評価委員会名簿
- 64 プログラムオフィサーの業務等（抜粋）

おわりに

本プログラムも平成26年10月に4年目に突入し、この度第3回の外部評価委員会を無事に開催することができました。

今回は、中間地点を迎えた本プログラムの現状を改めて総点検するというところで、大学教育認証評価の9基準に立ち返り、全体を俯瞰すると同時に、昨年度の外部評価委員会での指摘事項や低評価項目についての改善進捗状況についても合わせて検討いただくという方法を探らせていただきました。

中間地点を迎えたとは言え、本プログラムの目指すゴールはまだですが、今年度は従来の短期インターンシップや短期フィールドワーク、ショートフィールドビジット、リトリートといった活動に加えて、特に第1期生は本プログラム初めての博士論文研究基礎力審査を乗り越え、学生たちも、そして教職員も大きく成長できた1年となりました。

最後に、今年度も無事外部評価委員会を迎えられたことは、そのためにご協力していただいた教員、教育研究推進員、事務職員の努力の結果であると思います。

評価委員会は、これらの方々の本プログラムに係る種々のご尽力に対し、厚く感謝申し上げます。

広島大学大学院 放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム
評価委員会一同

評価委員会委員

職名	氏名	所属	役割分担
理事 副学長	岡本 哲治	社会連携・広報・情報担当	プログラム責任者 放射線災害医療コース担当
副学長	神谷 研二	復興支援・被ばく医療担当	コーディネーター 放射線災害医療コース担当
教授	小林 正夫	医歯薬保健学研究院	放射線災害医療コース担当
教授	岩永 誠	総合科学研究科	放射能社会復興コース担当
特任教授	観山 正見	学長室	放射能環境保全コース担当
学生代表	Uranchimeg Tsegmed	医歯薬保健学研究院	放射線災害医療コース 先輩メンター
学生代表	高田 モモ	総合科学研究科	放射能環境保全コース
学生代表	小松 真理子	総合科学研究科	放射能社会復興コース 先輩メンター

【お問い合わせ先Inquiries】

**広島大学大学院リーディングプログラム機構
フェニックスリーダー育成プログラム事務室**

**The Organization of Leading Graduate Education Program, Hiroshima University
Collaboration Office of Education and International Office**

〒739-8524 東広島市鏡山1丁目1番1号教育学研究科B棟810

1-1-1 Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, 739-8524

TEL: 082-424-4689・4638

E-Mail: phoenix-program@office.hiroshima-u.ac.jp

URL: <http://www.hiroshima-u.ac.jp/lp/program/ra/>